

胆石

中勘助

青空文庫

昭和十五年十月四日

姉の病気のため五月末から外へ出ず、もう大丈夫となつてからもやはり気がかりなので余儀ない用事の場合月に二、三度、それも見舞の人に留守を頼んで出たついでに日にあたつてくるぐらいが関の山だった。しかし近頃では姉もよほどよくなつたし、これからすこし散歩をしようと思つてるうちに今度は自分が病気になつてしまった。八月二十九日発病、胆^{たんせき}石。そのまえからひとの原稿を見てたのが二、三日ひどく大儀になつて机にむかう気になれず、籐^{とう}の枕をして寝ころんだまま読んだ。それを性来嫌いな暑さのためと思い、また永い間の看護や心労、執筆につづいての読

書や詩作、それらの疲労が重なったのだらうとも思っていた。それもあったかもしれないが既に体の調子が悪くなつてたのではあるまいか。二十九日の晩飯は食慾が進んでふだんよりよほど多く食べた。食後間もなく兄の碁の相手をして、暫くすると胸がつかえてきた。たべすぎのうえの碁のせいだろうと思つて消化薬をのみ書齋へあがつて長椅子に横になつてたが、過食のためならじきらくになるはずのところ反対にだんだんひどくなる。水おちのへんがはちきれそうだ。私は皆より先に二階で床についた。そして胸をさすつたり、寝返りをしたり、起きあがつたり、いろいろやつてみても一向かわりがない。そのうち下の人たちも寝てしまった。苦痛はますます烈しくなる。横になつても、仰向いても、椅

子に腰かけても、どうにもならない。しまいには蚊帳かやのまわりを歩きまわってまぎらそうとする。そのじぶんにはただのつかえではないと気がついた。が、胃潰瘍いはいようの痛みでも、盲腸炎のでもないらしい。診察とは思ってももう遅くもあるし、頭を悪くした姉を夜中におこして心配をさせたくない。どうかして朝までと必死にこらえる。そのうちふと胃にたまってるものを出してしまおうと考えついた。洗面所へおりていって器のなかへ吐く。血液らしいものはみえないけれど食物はほとんど消化していない。胃がからっぽになったらしいまでもちつともらくにならない。苦痛はまったく別のところからくるらしい。それからまた寢床へもどり転輾てんてんとしてるうちに疲労の極とろとろとして目をさまし

たら夜が白んでいた。私はとうとうたまりかねて下へおり姉を起して近処の先生をよんでもらった。その薬で胸の裂けそうな苦痛はよほど和やわらいだものの全体の気分はすこしもよくなならない。□□先生に電話をかける。午後来てくださるという返事だった。床を下の次の間へうつす。病気の程度によって看護の都合上そうする習慣になっている。

ひる過ぎ間もなく御来診。苦痛の長びいたのに比べて病名は無造作にすぎしまった。胆石です　といって、出てしまえばなんでもない　と腹部をあちらこちら　ここはどうです　とおさえられるのがまと的にあたって痛い。苦しさにまぎれて見もしなかったが肝臓のへんがは脹れてるらしい。絶食、湿布ということになって先生

は帰られた。姉が湿布をしてくれる。そういうことは慣れてもいるし上手だけれど病後のことで気の毒でもあり、心配でもある。××が薬をとってくるのをもどかしく待つうちにいつかうとうとしたらしい。横向きになつて背中の方に人の気はいがしたので首をねじむけてみたら「蟬」^{せみ}だった。来るはずになつてたのだ。が知らないうちに坐つてたとみえる。

「とても苦しいんだよ」

私はめつたにない弱音^{よわね}をはいた。その苦しさがゆうべからのとちがつてきた。身動きするのも息をするのも苦しい。そんな風で一夜があけた。

先生のお世話で看護婦さんがきてくれた。△△さんという健康

の化身みたいな人だった。看護の都合上次の間から座敷へもう一度移ることになり、そちらに別の床がのべられた。こうして私が座敷へ寝るようになったらもうおしまいなのだ。三日や五日で起きられないときに限る。三人がかりで寝てる床をひっぱり新規の床へびたりとつけた。あとは自分で転がってかわらなければならぬ。それ以外の方法では一層患部にひびきそうな気がする。で、私は齒をくいしばり体を廻転させてやつとこさとうつぶせの姿勢にまでなったがその拍子に思わず イタイ イタイ イタイ イタイ と悲鳴をあげた。石のつかえてるあたりだろうか、体の動きにつれてまるで体内の錆びついた齒車が無理やり逆に廻されるような痛みを感じる。私は半廻転して床と床のあいだのへんに下

をむいたまま両方に握り拳をこしらえて上体を支えている。しかしいつまでもそんな姿勢はつづけられないのでまたもや悲鳴をあげながら廻転し、仰向けを通りこして右を下に止ったときはヒーヒーいつて短い息をはずませた。吸い込むたびに痛むので息が半分しかできない。歯車の歯が折れてしまいそうだ。そのままぐたりとしてあがりかけた魚みたいに喘いでいる。

これから以下は病床日誌を参照しながら書く。朝、昼、晩と水すいみつとう蜜桃の汁をしぼって百グラム乃至百二十グラムくらい吸いのみでのむ。――葛湯くずゆの百五十グラムは味がなかった。――水蜜は本場のを貰ったのが冷蔵庫で種まで冷えている。こんよりと底澄みのしたきめの細かいその果汁はさながら崑崙こんろん崙の玉を溶かしたか

のようにみえる。それはえならぬ薰りと舌をとろかす甘みをもちながらしかも卑しい人肌の温みのない西王母せいおうぼの乳である。仙女の恵みの露はしんしんとして指の先までもしみわたる。

夕刻副院長さんがきて注射をしてくださる。

夜。よく眠る。

三十一日

苦痛も熱も呼吸の数もすこしへったが脈みやくはく搏はくが九十六にふえた。野菜スープは格別の印象も残らない。林檎りんごの汁は錆色さびいろに濁るのが難である。しかしその栄養価にふさわしい？コクのある複雑な味がする。私が水蜜のほうばかり望むのを△△さんはなるべ

く林檎にしようとする。

九月一日

朝。たいへん気分がいい。痛みも少くなつた。西瓜すいかの汁は色も安つぽく、味も水つぽくて栄養になりそうもない。元来西瓜は好きなのだけれどこうして果汁にしてみると掛け値のないところが出る。

二日

体温、脈搏、呼吸とも普通になり、食欲が非常に進んできた。きょうの果汁は西洋梨なし子。在来なつの日本の果物にはない繊細なお

りである。旧い時代ふるの人はこういう匂いを薬臭いといって嫌いもしたであろう。幸い私は一時代遅く生れたためかかる異国の薫りをもめでたく賞美することができる。それは蒼白く、ほろ甘く、いみじきたきものの香につつまれたカトリックの尼僧の恋にも譬たとえようか。

三日

食慾が進んだせいもあり、ほかに所在がないのであれやこれやとちがった種類の果汁を考えては注文を出す。果物はお見舞いにもらうから人を煩わづらわして買わずとも大抵家で間に合う。だからこそ気楽に注文が出せる。病床日誌によればきょうの食事は

朝 おまじり一〇〇 桃果汁八〇

九時半 ネーブル果汁六〇

十一時五十分 馬鈴薯^{ばれいしょ}うらごし小量 トマト汁七〇

二時半 林檎果汁一〇〇

五時 おまじり一碗 大根おろし少々 梨果汁八〇

七時四十分 葡萄果汁^{ぶどう}五〇 番茶二〇。

摘要の欄に 食欲増進あそばす。今朝はじめておまじりをめしあがってたいへんおいしそうでした とある。おまじりはほんとうにうまかった。否、うまいなぞという生やさしい言葉でいえるものではない。それは舌の感ずるただの味ではなく、その味をとおして命とつながっている。命そのものとさえいえるくらい深刻

無味のうまみだ。平生から私はめつたにまずさを感じたことがない。米のうまみもよく知ってるつもりだった。ところが半世紀以上も味いつづけたその米の味がこれほど貴いものだとは今はじめて知った。とろとろのおまじりのぬるみ、舌にすべるぬめっこさ、甘み、こく。一匙一匙が不老長生の靈藥の思いである。トマトの汁はさっぱりしてるけれど鋭さがあつて果汁のような懐しみがな
い。ネーブルは食べにくいことを除けば好きな果物のひとつだが果汁には色にも味にも妙にどぎついところがあり、どこか銀座娘を聯想させる。れんそう葡萄もはじめての見参だ。ろうかん琅玕の雫かともみえる青葡萄の汁。

五日

病氣のときにはよくあることらしい。仰ぎようが臥してじつと天井を眺めてると松板の手のこんだ木目がいろいろな生きものの形になってみせる。先方ではおどかすつもりだろう。だがこちらもこの年になつては化けそうに功をへてるのだ。銀の匙の坊ちゃんとは訳がちがう。怖いどころか退屈しのぎになる。顔のま上にはぬえの胴体をとつたみたいに猿の頭へいきなり蛇の尻尾をつけた怪物がいる。その隣の板には眼玉ばかり大きくてそのわりに間のぬけた顔の魚が口をとがらしている。それとひとこまおいてつづきの荒波のなかを分厚な唇をもつたつわものが鬚ひげを水に靡なびかせながら泳いでるのはアツシリアの彫刻にでもありそうな図だ。そのむこ

うには首をのぼして疾走する馬の頭、次の間との境の欄間のところには平家蟹^{へいけがに}みたいな面が二つ、平家蟹より品がなくて妖気を帯びてるのは蜘蛛^{くも}の精でもあろうか。そのほか雁の横顔や、古生物の化石や。

寝つきがわるいでもなく、眠られないでもないにかかわらず寝るのがつまらなくて 夜がなければ、はやく朝になってくれればと念じつつ目をとじる。その待ちこがれた朝がくれば雨戸があげられ、蚊帳^{かや}がはずされて若く輝かしい「きよう」の笑顔が私を見舞う。頭のほうは見るとに苦しいので問題にならない。足のほう、北の二重のガラス障子を△△さんがあけてくれると写真機のシャッターが開かれるように四角にくぎられた外景が現れ、冷た

い空気が液体みたいな輪郭をもつて流れこんでくる。それが衰弱と睡眠のためにけだるく弛緩した神経を澆刺と生気づける。四角のなかには椎の木と塀外の街路樹、その枝葉のあいだからちらほらと空がみえて、時には雀の声がきこえる。ただそれしきのものがこよなく美しく目ざましい。私がせいせいとして新にかえられた水に遊ぶ魚のように呼吸をしているところへ△△さんが洗面器に湯をもつてくる。そして幾たびも手拭をしばってわたす。それをうけとって丁寧に顔や頸筋、耳のなかなどに残った夜の粘りをとったのち最後に両手を、指を一本ずつ克明にふいて手拭をかえす。と、それをさげた△△さんはかわりに朝の食事をもつてくる。

きようは蜂蜜はちみつをたべた。砂糖は配給、葡萄糖はさがしてもな

し、蜂蜜はこのあいだ姉にたべさせようと思つて方々たずねたがどこにも品切れだったのであきらめてたところほかの買物にいつた誰かが思いがけぬ店で見つけてきた。私は元来甘党でないにかかわらず病気のせいかしきりに甘いものがほしい。この文字どおりの天然の甘露は砂糖とちがつて胃にもたれることがなく、砂にしみる水みたいに吸収されて五体の養いとなるいみじくも貴いものである。どういう訳か我我日本人は従来ほとんどこれを賞美しなかつたけれど、あの横縞よこしまの仕事著をきた翅はねのある採集者たちが四角八面に飛びまわつてここの山陰、かしこの野原、花園や果樹林に咲き乱れたいろいろな花からたんねんに汲くみとつて運びか

えったこんじきの甘露、これを甜なめて蝗いなごをたべてたとすれば古いにしえの
 ユダヤの予言者は決して粗食だったとはいえないであろう。慾を
 いえば私には紀きしゅう州から到来の蜜柑みかんの花の蜂蜜がいちばん望ま
 い。

六日

毎日目にみえて軽くなるとはいえ寝返りするたびに声を出すほ
 ど痛かったのがいつか忘れるようになつた。らくに寝返りが
 できたらなあ　これが最初の願いだつた。ようやく大願成就した
 のだ。きょうの病床日誌の摘要欄には　始めて患部の痛みなしに
 深呼吸が一回できました　とある。ちらりと見たお見舞の果物の

籠^{かご}に赤葡萄の房のあつたことをおぼえてた私が 今度は赤いほうを と注文しておいたのを、栄養に気をとられた△△さんは娘が反物をよりどるような私の好みを忘れたとみえて青葡萄の果汁がずっとつづいた。で、きょうまた赤いほうを催促した。△△さんは ああそうでございましたね。どうも…… というようなことをいって赤葡萄をしぼってきてくれた。

葡萄の美酒夜光の杯

飲まんと欲して琵琶^{びわ}馬上に催す

酔いて沙場^{さじょう}に臥^ふす君笑うことなかれ

古来征戦幾人か回^{めぐ}る

これは夜光の杯ならぬギヤマンの吸いのみ、魂をとろかす力もない搾り^{しぼ}たての果汁にすぎないけれど、その奥ゆかしくさびた紅は千年をへだてる初唐の色である。なつかしい微妙な薫^{かおり}は駿^{しゅん}馬^めいなく大宛^{だいえん}のものである。私は夢想の神薬でもものむようにひと口ずつ口にくくみ、舌に味わって、やがてすっかり飲みおわったときにおぼえず あーうまい と讃嘆の声をあげた。

七日

朝 トースト三きれ 牛乳一〇〇

事変後バタも紅茶もやめた。自然パンも牛乳もやめることにな

ってから久しい。そこへこのトーストと牛乳だ。バターも人造バターは先生から禁ぜられたので普通のバターだ。まさに醍醐味である。先日の米の味といい、きょうのこれといい、我々が日頃自分の舌を甘やかすすぎて勿体ないくらいの天恵を忘れさせてることを思わせる。これからみれば昔荒野をさまよって飢え疲れた漂泊の民にとっては食べられるものでさえあればなんでもマナであつたであろう。

きょうから特に用便の時だけ起きあがることを許された。寝返りができてからは起きられたらが次の念願であつた。こうしてらしくなると爪のつめのびたのが気になりだした。△△さんにとつてはもらったものの普通のとりかたではとつたような気がしない。

私のこの爪を気にする病いは癩かんという古く曖あいまい昧ではあるが同時に多含で適切である言葉でしかいい現せない。私が仙人になれない第一の理由は雲にのれないことでもなく、霞かすみがくえないことでもなく、実にこの爪を長くすることが辛抱できないところにある。私は用便のあと勝手に時間を延長して爪をきりはじめた。思いきり鋏はさみの刃をくいこませてぎりぎりまではさんでしまう。さばさばした。垢あかだらけの仙人生活から足を洗った思いだ。

十四日

午後。御来診。起床を許された。咲き残った朝顔もおしまいに
なり、鉢もかたづけられていた。そのためからりとした庭に苔こけが

めずらしく青々として、秋海棠^{しゅうかいどう}がさいている。睡蓮^{すいれん}の葉が浮きながら枯れて、すっかり秋だ。はじめて温度表をみる。これは青赤黒で書きわけられた私の肉体の調子の狂った交響楽である。心臓の打楽、肺の管楽、熱は頭の琴線の絃^{げん}楽^{がく}か。序曲は派手に始まつてゐるがやがて頗^{すこぶ}る単調平板になり、それが「先生」という指揮者の命令によつて突然中止されたのだ。が、早晩終曲の演奏はあるにしても、さしあたりこの曲が未完成に終つたのは幸^{さいわい}なことであつた。

青空文庫情報

底本：「中勘助随筆集」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年6月17日第1刷発行

底本の親本：「中勘助全集 第三卷」角川書店

1961（昭和36）年2月28日

初出：「新風土」

1941年（昭和16）年1月

入力：呑天

校正：noriko saito

2019年4月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

胆石

中勘助

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>